

## 〔研究報告2〕

### 溜池をめぐる近世都市論

—弘前と南溜池—

弘前大学 長谷川成一



はじめに

ただいま紹介されました長谷川でございます。

私の報告の題名が「溜池をめぐる近世都市論」、副題として「弘前と南溜池」ということでご報告致します。時間がないようですので、なるべく時間内において、この後のご報告にご迷惑をおかけしないようにお話を申し上げます。

先程第1の研究報告におきまして榎森進先生から、中世の末から幕藩体制の崩壊期に至る北海道・蝦夷地を中心とした、津軽・弘前との関わりをドラスティックに論じていただいたわけであります。私の報告は、榎森先生とは対照的に、弘前の内側からもしくは弘前の南溜池という溜池を通じて弘前の近世都市像といいたいでしょうか、都市民衆の動向、藩政の動向との関わりについてとりあげてみたいと思います。

#### 1、弘前城下の建設と南溜池の成立

ご承知の通り、弘前における南溜池とは、18世紀後半の弘前城下絵図（本報告の末に掲載したので参照されたい）をご覧くださいと思う

のですが、ちょうど城下の絵図の真中あたりといいいましょくか、南溜池と書いてあります部分ですね、そこに位置します。方位からいうと城下の南側に当たるのですが、この南溜池を中心としてお話を申し上げます。

南溜池は、新寺町が慶安3年（1650）に町立てされる以前には、弘前の南の堺、南の端に該当したのです。現在南溜池というのは、最近町名がつけられた「南塘町」の町域にほぼ該当するのです。明治維新後、明治11年（1878）5月に溜池の中での開墾が進められていった結果、和徳小学校などの「学田」として貸与されることになりました。また牧場が設けられたり、溜池としての性格を喪失してしまったといいいましょくか、現在では弘前大学医学部付属病院並びにグラウンド、それから住宅地として存在しております。藩政時代における南溜池の跡地もしくは痕跡としては、東側の土塁がわずかに残っておりまして、現在国史跡・津軽氏城跡の一つとして残存し整備事業が進行中です。

「平山日記」や「津軽一統志」によりますと、南溜池の建設並びに成立は、慶長17年（1612）と同19年の両説があります。いずれにせよ、これは津軽藩2代藩主津軽信枚の時期、慶長15年に弘前城の建設、それともなう城下の建設、その間の津軽氏における城下建設プランに基づいて、南溜池が建設されたのは、まず間違いないであろうと考えられます。この城下建設プランにおきましては、慶長年間にまだ豊臣氏が大坂に勢力を保持していますし、大坂の陣の前でもありますことから、やはり軍事的緊張を無視しえないだろうと考えられますので、そこにおいておそらく城下を防衛する南側の軍事施設として、この溜池の建設が実施されたのは間違いないのではないのでしょうか。これは完全に人工的な溜池としての土木工事を施したものでして、そこに見える性格はまさに軍事施設そのものということで、そのような設置の意義がまず第一義として考えられているのだらうと思われるのです。

後年の編纂史料である「鹿内家記」の中に、公家の花山院忠長が勅勘

をこうむって、蝦夷カ島ついで津軽地方に配流されたときに、南溜池の水面に映る景観を非常に愛でたということで、

池ニウツル岩木ヲ不ニノ姿ニテ眺メハ庭ノ三保ノ松原

いう歌を詠んでいます。しかしこれは何も初めから景勝の地にしようと思図して、津軽藩が南溜池を建設したわけではありません。ある意味では城下建設の副産物であったと思うのですが、これは後の南溜池の持つ多面的な性格の形成に大きな役割を果たしたのであり、結果として南溜池に認められる機能の一つを形成する契機になったのだらうと思われる。一応南溜池の建設と目的・位置付けなど、建設当初における性格というものについて、確認しておきたいと考えた次第です。

## 2、新寺町の成立と南溜池の機能の変化

次に新寺町の成立と南溜池の機能の変化ということですが、「津軽編覧日記」慶安3年2月の記事によりますと、建設当初の弘前が大きな変容を余儀なくされ、都市プランに大幅な変更を強制されたのは、慶安2年（1649）の寺町大火によってです。現在の元寺町は、もとは寺町といって寺院街があったのです。この寺町大火によって寺院街が弘前の南側に移転して、新寺町が成立することになるのです。「津軽編覧日記」の当該記事の後半部分のところにによりますと、「寺院之儀御城北之方春日之辺ニ御沙汰も有之候処、毎度南大風強、御城下へ当候ニ付、風防材木仕立候ハ、可然旨ニテ、南ニ新寺町地割被仰付候」と書いています。この記述によれば、新寺町の建設ないし新設は城下を外敵から防御する目的ではなく、弘前という都市を南からの大風より守ることに、すなわち新寺町に防風林の役目を果たすように期待している。強風から城下を守ること、これは換言すればただ単に風当たりが強いということだけでなく、おそらく火災を防ぐ目的があったのではないかとはいえますのは、

慶安2年の寺町大火が強風に煽られて、いわゆる大火になってしまったということになっていますので、そのような反省にたって都市プランにおける防火体制強化の意味もあったのではないかと。例えば、江戸における明暦3年（1657）の大火後、幕府は火除地というものを江戸に数多く設置するわけでした、そのような都市プランの変更にともなって、軍事施設としての性格を南溜池と新寺町一帯が脱却して、都市を災害から守るという機能といいたいまいしょうか、それに南溜池の南側に設置された新寺町が位置付けられたのではないかと考えられるのです。例えば、江戸の大火の70%は北西の卓越風によって助長されたものであり、それは現在でも同様であることが指摘されており、火災と大風の問題は当時の都市としては深刻な問題であったのです（菊池万雄編『近世都市の社会史』名著出版 1987年）。

また現在、先ほど申しました南溜池の史跡が残存しております中に、「最勝院構」と記した木材の立札が立っていますが、実は史跡名称として「最勝院構」は正確ではありません。改めて申すまでもないことですが、最勝院は明治維新後、神仏分離の過程において現在の地に弘前八幡宮の場所（現八幡町）から移転してきたのです。正しくは「国日記」寛文12年（1672）7月4日の条に「新寺構」という文言があることによって、この新寺町一帯の区域は「新寺構」と、当時呼ばれていたことが判明したのです。これは「国日記」寛文12年の前述の記事のみではありませんで、そのほかにも弘前大学附属図書館に所蔵されています弘前八幡宮の社務日記に収録している寛保4年（1744）7月18日の目付廻状に「新寺構相触可申候事」と、「新寺構」の文言がありますので、幕藩体制を通じて「新寺構」の名称は存続し活用されているのです。

「構」という文言ですけれども、これは昨日、玉井先生が基調講演のなかでも申しましたように、我々弘前におりますと、「長勝寺構」など軍事的施設としてのイメージが非常に強すぎることもありまして、「構」

という文言の中にかなり思い込みと思い入れがあるのではないかと考えるのです。この「構」という言葉自体の字義には、例えば『日本国語大辞典』（小学館刊）のなかには、構というのは、砦という意味もあるが、その他邸宅、家屋敷、それを囲む一角の意味というのものもある、と見えまして、先程の「津軽編覧日記」の当該条に見えるように、軍事施設、砦としての性格というような意味のものからは、脱却いたしまして、「新寺構」は軍事的な色彩といいましょうか、そういうものではなく、むしろ新しく建てられた寺々を囲む一角が存在する地帯、いわゆる新寺院の集合した地域であると考えるのが、妥当ではないかと思われます。若干横道にそれましたが、新寺町の成立ということは、そのような視点ないし視野から考えられるのかな、という気が致します。

先程も若干触れましたが、南溜池は成立当初、いわゆる弘前城下の建設当初にはまさに軍事的な色彩の強い施設であって、それは都市プランの中における軍事施設としての側面を否定できないところです。しかし以上にみえるような、災害を契機とする都市プランの変更という趨勢のなかにおいて、その性格が変化してくるであろうことは間違いないところです。「国日記」享保15年（1730）9月22日の条の記事内容に、非常におもしろい文言が認められるのです。この記事のを要約致しますと、それは元禄9年（1696）、4代藩主津軽信政が南溜池の付近を回って歩いた後、重臣達に対してつぎのような話をしたというところです。この条に、

南溜池之儀何と相心得罷有候哉、以之外干水致せ大橋より上ニ牛馬繫置候、右溜池は我等慰所ニも無之候、又用水之為ニも不申付候、高源院様思召被遊御座、殊外被添御意御取立被仰付候所、皆か目に相見江不申候哉…（中略）…依之末水能持候様ニ急度取立可申旨被仰付候由、

とあります。ここにみえる「高源院様」とは、先程触れました2代藩主

津軽信枚のことです。藩主信枚が特別の思し召しをもって、この南溜池を設置したのだということとして、その趣旨については具体的に申し述べた箇所が見当たりません。それを明確にせず、現在の状態は建設当初の意図に反しているという前提で問題点が述べられているのです。すなわち元禄9年の実態と建設当初の原則が如何に乖離しているかということを、この史料は強調しているのです。「我等慰所」－この我等というのは4代藩主津軽信政のことでありまして－、つまり現在の南溜池の実態は、いわゆる自分の憩いの場所（憩いの場所とは、さまざまな意味があるでしょうが、景勝の地として、非常に心が慰められるところであるということにします）、それを楽しむところとして考えられているが、現在の状況は本質的には違うのだといっております。

それから、もう一つは用水です。灌漑用水の確保のためにこの溜池は必要である、というよりは必要とされて現在に至っているということで、それも本来の目的なのではないのだということです。ここにおいて、本来的には高源院様、すなわち2代藩主津軽信枚が造ったその意志に沿うようにということ－それは南溜池が水を湛えていることですが－、恐らく津軽信枚の意志はこうだったんだということを、先ほど申しましたようにここにおいてハッキリと書いておりませんので、これは何とも推測にすぎないのですが、水が湛えられているようにということが必要なのだといっております。そのことは、慰所でもなければ、用水のためでもない、すなわちここでは堀の役割を、先ほど「1、弘前城下の建設と南溜池の成立」でも申しましたように、いわゆる軍事施設としての堀としての役割をすべきなのだ、と藩主は考えたのでありましようか。しかし元禄9年の実態はそうではないということです。ということは、現実の実態と当初の軍事施設としての溜池の機能が、乖離しているということを津軽藩はそういう意味で完全に認めていたわけです。

17世紀の末に至って、南溜池はこのような建設当初からの機能の変化

が現実の問題として存在したのです。「国日記」元禄14年（1701）5月9日の条や同天保3年（1832）年7月朔日の条、同天保12年（1841）5月11日の条に見える、南溜池内での漁の問題が浮上します。「国日記」元禄14年5月9日の条の場合には南溜池で網を引かせてみた。そうしたら鮒が大きいのと中くらいのが2匹しか獲れなかったという話です。

「国日記」天保3年7月朔日の条に見えます、石川屋伊助が南溜池へ「子鯉式万四千疋余放入候旨申出候得共、御出之節御漁被遊候処」と出てきます。この中の「御漁」を遊ばされたのは藩主です。従ってここにおいては南溜池における、このような魚の飼育・養殖は、完全に藩主御用のために行うのだということです。「国日記」天保12年5月11日の条に見えるように、これは先ほどの鯉を放流したことですけれども、それと関連して、ここにおいては町方の者や家中の召使がそこで釣りをするために、鯉が減るということ、それは非常に困るのだと述べているのです。ここにおきまして南溜池は、まさに藩主の「御用池」としての性格を付与されているのです。

藩主の「御用池」の側面のほかに、実は文化3年（1806）の絵図（弘前図書館蔵）によると、「十三溜池」という別名が南溜池にはついています。これは弘前城下の南郊の農村地帯にあります各用水の溜池とそれが接続していき、この絵図の中に見えるように灌漑用水の施設として南溜池が機能していたのは明らかですし、明治初年の絵図の中には赤田組の農業用水に使用するということが明記されていますことから、自明のこととして当時は認められていたのであろうと思われます。。

18～19世紀にかけての南溜池は、まさに設置当初の軍事施設としての色合いを全く払拭され、加えて先ほど申しましたさまざまな機能といえましょうか、灌漑の機能もあり、また慰所（藩主信政の意識としては、あくまでも藩主のものであって、他の人々のものではない）、ついで藩主の「御用池」としての機能が付与されてくるわけですが、幕藩体制も

後期に入りますと別の意味での軍事的役割を、再び担わされてくるのです。これはまた後に述べることに致します。

### 3、近世都市弘前と南溜池

**景勝の地・都市民衆憩いの地** 「近世都市弘前と南溜池」の問題に入りますが、まず第一に景勝の地・都市民衆憩いの地・雨乞祈祷の地について申し述べます。都市民衆憩いの地としての南溜池は、「国日記」文化5年（1808）閏6月20日の条に見えます。また維新後ではありますが「津軽覚え書」という史料に（実は明治29年に刊行された『鷹ヶ丘』という本に収録されたもので、弘前の名勝を紹介したものです）、南溜池を表現して「昔鏡湖の称あり、今は水涸れて田園となれり」とあります。さらに続けて、

回顧すれば岩木山に接し、唐金日暮の二橋茂森稲荷の茂林遠近を粧点し、五重塔影微に鐸声を送り住吉祠林徐ろに月を吐き、万斛の涼味人骨を爽ならしむ…（中略）…男女群衆其繁昌云はん方なし

の記述がありまして、南溜池とはこのようにまさに景勝の地であり、かつ自然の公園のごとく近代弘前都市民の憩いの地であると述べられています。これは明治維新後に、このような景観に変更したというのではなくて、寛政年間に弘前へ廻遊してきた菅江真澄が「つがろのおく」の中に、水が涸渇していたとはいえ、大変な景勝の地であるし、「花も盛ならん頃はわきてよかりしにや」というくらい、絶賛した景色がこの南溜池を中心とした地域に展開していたということです。先ほど申しました「国日記」享保15年（1730）9月22日の条にも見えましたように、藩主の慰所としての南溜池ということ、すなわち藩主がその景色を非常に愛していた地であったのです。これは幕末に百川学庵の筆になる「鏡池春景之図」（本報告の末に同図の写真を掲載してあるので参照されたい）



など南溜池を題材とした絵画が描かれていることから、南溜池を中心とした地域の景観が、まさに景勝の地であったということを証明するものであらうと思われます。つまり藩主の意識は別として、景観は広域的なものですから、それを見る人々によって共有されることはいうまでもありません。したがって景観を独占することは事実上不可能であり、この場合、南溜池一体のゾーンとしての景観は、弘前の都市民衆共有のものとなったのです。

南溜池が景勝の地であり、また都市民衆憩いの地であることは、これは先ほど言いました藩主の「慰所」「御用池」であると同時に、藩主だけの独占のものではなく、これは都市民衆の憩いの地であることには間違いないわけです。例えば「国日記」文政5年（1822）5月28日の条にみえますように、この南溜池で都市民衆が雑魚釣をする、それから「近辺之子供等并家来共右池ニ而浴水等いたし」て溺れ死んでしまう子供もいるということですが、その他「国日記」文政13年（1830）4月9日の条に見えますように、またこの近辺で雑魚釣をしてくわえ煙管でもって往来をするものがある。同じく「国日記」天保13年11月27日の条にありますように、「大円寺夜宮之節南溜池土居参候処、水囊屋要吉弟子福次郎」が大円寺夜宮の雑踏のなかにおいて喧嘩をするというような記事があります。また「国日記」文化5年閏6月20日の条にもありますように「御家中召使并町家之者共涼に罷越」、煙管をくわえたり、花火等をしたりとも見えます。即ち近代においてみられた（「津軽覚え書」）、まさに「自然の公園」としての、また納涼の際の雑踏にみられる、このような多くの都市民衆、弘前の人々がその憩いの地として訪れるこの南溜池は、それが近代に入っても藩政時代の雰囲気以前として存続し、人々が参集する場所としてあったのです。例えばこのような都市において人々が参集する場所、これは憩いの地として、景勝の地としてそのようなものが当初の都市プランの中に組み込まれていなくても、人口の密

集する地域である都市の中にこういうものが次第に設定されていくことは、当然の趨勢なのではないでしょうか。

これは江戸でみられる、例えば「盛り場」や「悪所」のようなところ—「悪所」は景勝の地と違いますけれども—これは後で玉井先生のお叱りを受けるかもしれませんが、このように人口が密集した地帯における南溜池のような機能を持つものが、都市プランのなかに当初から組み込まれていなくても、平和の持続する時代、安定した政権下における都市の繁栄の中にあっては、自然とできてくるということが弘前においても確認されるかと思います。いわゆる都市の成熟にともなう繁栄を享受する市民層が、次第に増えてきたともいえましよう。

**殺生禁止** もう一つ、景勝の地、憩いの地のほかに「国日記」元禄16年（1703）2月3日・同享保19年（1734）3月7日・同文化4年（1807）8月21日・同文化5年7月19日の条に見えますように、南溜池付近では殺生が禁止されていたことです。「国日記」元禄16年2月3日の条に大円寺溜池と五十石町古川における狩猟の禁止が見えるのでして、具体的には鳥取法度、即ち同地では一般的に狩鳥を禁止され、それで特別に狩鳥を許可する鳥札を出すということです。この五十石町古川は現在の西濠を指すのかと思いますが、この五十石町古川のほうは別にいたしまして、「国日記」享保19年3月7日・同文化4年8月21日・同文化5年7月19日の条に見えますように、南溜池では餅で雁や鴨をとるのは禁止、それから漁をするのは勿論駄目。それはまさにこの史料にあるように、ただ単に禁止するというではありません。城下の河川全部で魚を釣っては駄目とかそういうのではなく（例えば「御用格」寛政本巻7

「一統御触之部」天明4年6月13日の条によれば、五穀成就祈祷の際に岩木川を始めとする郡内の河川において7月15日の1日のみ、漁留や殺生停止が命じられている。つまり他の日には殺生が禁止されていなかったことを示唆している）、これは例えばお城の堀などで魚を釣るのは禁

止ですけれども、お城の堀は別に殺生停止ではない。

ここにおける南溜池の場合の表現は、「殺生停止之处」、例えば「国日記」文化4年8月21日の条の覚のなかにありますが、「殺生停止之处甚以不埒二候間」と出てまいりますし、「国日記」文化5年7月19日の条におきまして近所の子供・召仕達が魚取りをすることに対して、南溜池においては「殺生之儀前々より停止之处」なのです。庶民にとっては「殺生停止之处」ということでありまして、「殺生法度」が南溜池においては庶民に対して適用されるのだ、と主張しているのです。しかし藩主は「御用池」とあるところの南溜池において、漁をする。まさに身分によって殺生法度の適用が区別される、という対比が鮮明にみられたのです。殺生法度などの側面からも、弘前における都市民衆の南溜池、また南溜池を中心とした地域におけるさまざまな活動に、管理の手が延びることになったのでした。

**雨乞い祈祷** 殺生法度即ち殺生の禁止が施行された南溜池は、弘前における雨乞い祈祷が実施される地でもあったのです。弘前における雨乞い祈祷を行うのは大行院と大円寺でありまして、津軽領内全体をおおう雨乞い祈祷は、藩命によって弘前八幡宮の社家頭が四社（浪岡賀茂明神、長浜広瀬宮、田野沢龍田大明神、野内貴船大明神）を回って行うものでありまして、近世都市弘前における雨乞い祈祷とは、どうも四社のそれとは関係がないようであります。つまり津軽領内全体の雨乞い祈祷と、弘前における雨乞い祈祷とは性格が異なるようです（拙稿「近世北奥大名と寺社」尾藤正英先生還暦記念会編『日本近世史論叢』上巻 吉川弘文館 1984年）。

南溜池を媒介として弘前の雨乞い祈祷が大円寺と大行院において行われるということにして、「国日記」享保10年（1725）6月10日・同同年同月11日・同延享元年（1744）5月5日の条に見えますように、白狐寺の境内に壇場をつくって、それを南溜池に張り出して祈祷を行うのでし

た。ところで弘前における渇水ですけれども、「国日記」享保10年6月17日の条に「弘前町中所々井之水無御座」との記述から次のことが分かります。つまり弘前城下においては各家の水の供給が、上水道ではなく井戸でもって行われていた、ということです。その井戸の水が枯れるということが、雨乞い祈祷にいたる引き金になります。そしてこの雨乞い祈祷は、何度か行われるのですけれども、町中総出で南溜池へ押し掛けて思い思いに祈祷を行う。その際には町々から灯籠を出し、そして弘前の民衆が雨乞いのために太鼓を囃し、それから神明獅子舞をおこない、大勢の見物者と演技者が雨乞い祈祷に参集することによって南溜池一帯は大変な賑わいになります（「平山日記」・「永禄日記」等）。まさにこれは、都市民衆のエネルギーの一種の爆発ではないでしょうか。余りにも大勢の民衆が押し寄せて、死者まで出たということが史料に出て参ります（同前）。

さきほど、滝本寿史氏に確認致しましたが、近世弘前においては都市騒擾、即ち「打ちこわし」が確認されていない、都市騒擾が江戸のような「打ちこわし」へ発展するような、また県内におきましては、青森・鰺ヶ沢において起きましたような「打ちこわし」の発生が確認されていない都市です（滝本寿史「宝暦・天明期津軽藩農村の諸問題」『弘前大学国史研究』第71号 1980年）。したがって都市民衆のさまざまなエネルギーがどのような形で発散されるのかといえますと、いま申し上げました形で弘前における都市民衆のエネルギーは、爆発する部分があったのではないかと考えられるのです。

**塵芥捨て場所、身投げ地** 南溜池のいま申しましたような性格を踏まえて、近世後期における都市の各問題に入りたいと思います。南溜池に塵芥一ちりあくたの類いを捨てるなという法度が最初に出されますのは、「国日記」宝永3年（1706）11月9日の条に見えるところであり、17世紀初頭です。これは恐らく南溜池の美観を損なうとか、そういう理由か

らではなく、さまざまな溜池の諸施設、水門、それから樋—これはゴミが放水路へ流れないように防ぐものです—を保守するという観点から打ち出されたものです。また現在に残る土手は当時「羽口」といいましたが、ゴミが土手に当たることによって土手が痛み、その土手が決壊致しますと弘前は水浸しになるわけですから、これは大変深刻な問題でした。土手の破壊とゴミによる色々な危険を防ぐため、塵芥を捨てるなという話ですが、これは享保期以降次第に近世都市弘前におけるゴミ処理の問題が深刻になってきたことを物語っているのです。その原因としてはさまざまな問題が考えられるのですが、この時期における都市人口の増加ということが当然あるのです。これについては他に書いたもの（長谷川成一編『津軽近世史料 1 弘前城下史料 上』北方新社 1987年 解説「弘前城下について」を参照されたい）がありますので、それをご覧くださいと思います。

南溜池を含んだ弘前における塵捨所の問題については、まず18世紀後半の弘前城下絵図（前述の絵図を参照のこと）をご覧ください。18世紀後半の弘前城下絵図のなかに「塵捨所」というものを書き込んでおきましたが、「国日記」宝暦5年（1755）3月朔日・同11年4月7日の条にあります、城下に設定された塵捨所と町の境界を落しこんでみたわけです。この問題については色々と言うべきことがいっぱいあるのですが、時間の関係から結論だけ申します。この塵捨所の存在している場所の特色だけ申しますと、塵捨所が設置されております場所というのは、町の外れ、すなわち近世都市弘前の外れの地域、それから侍町と町人町の間の境、それから各河原もしくは溜池のように土手の下とかですけれども、川欠けの場所、いわゆる河原として未整備のところ、そのようなところに塵芥、ゴミが投棄されるということです。南溜池の土手の下といいたいでしょうか、現在の桶屋町の西側ということになるのでしょうか、これは「国日記」享和2年（1802）3月4日の条に見えますように、「大円寺

土手通り」が享和2年の時点においては、投棄場所として禁じられることになったということです。ゴミ捨て場の変更があったわけでありまして、塵芥投棄というものの、これが次第に弘前の都市問題として一ゴミは捨てれば次第に増えるわけですから、投棄場所の問題が南溜池もあわせて、近世都市弘前の中にあって深刻化していったのです。

南溜池の付近が、塵芥捨て場所すなわちゴミ捨て場に指定されていたこと自体、それから「国日記」貞享3年(1686)5月5日の条などに見えるように、南溜池において身投げが横行し、それから付近に死体が捨てられます。天明2・3年は天明大飢饉の時ですが、「国日記」天明3年(1783)10月19日の条にみえるように、餓死者の南溜池付近への投げ捨てが横行しました。その他の飢饉でない年でも身投げや死体捨てとゴミ捨て、ゴミの投棄と同様に死体も溜池へ投げ捨てられるということになるのです。ここにいわば景勝の地、憩いの地、宗教的な場という「聖」の部分というものと、さきほどのゴミの問題、それから死体捨ての問題、身投げの問題、そういうものを「聖」に対して「賤」と呼べるのか、ちょっと自信のないところもあるのですが、一応このような対比がもしなされるとするならば、都市における「聖」「賤」入り交じりの状況が、かなり典型的といえるでしょうか、南溜池において双方がティピカルに出てくるのであろうということです。

#### 4、幕藩体制崩壊期の南溜池―北方問題との関わりにおいて―

それでは最後の幕藩体制崩壊期の南溜池ということについて、北方問題との関わりの視点からお話を申しあげます。南溜池の改修工事は、藩政の成立期において南溜池を建設した時期から、当然改修工事が行われているのですが、「国日記」元禄10年(1697)7月12日の条などによりますと、南溜池のさまざまな改修工事は弘前の町役でもって賄われている

ことが分かります。ですから、この町役、町方の負担によって南溜池の改修工事がおこなわれるということは、南溜池が都市の中にあるから当然といえば当然なのですが、南溜池が近世都市のなかに、まさに都市プランのなかに組み込まれたもの、都市の町方のものとして—ものとして—というのはあまり正確ではありませんが—、町方がおおいに関わるものとして存在していたのです。しかし「国日記」文化3年（1806）3月11日の条の記事に見ますと、「下在用水不足」を理由に、町役ではなく「郡所米銭」をもって人夫の調達をおこない、郡奉行の指揮の下に南溜池の改修工事が行われるようになったのです。

すなわち、ここにおきましては灌漑用水不足の補充を第一の目的として把握されているのです。南溜池の位置付けというのは、まさに灌漑用水の補いにあるということでした。しかし、これは北方問題、さきほど榎森先生からご報告をいただきましたが、いわゆる津軽藩の蝦夷地警備の問題が、藩政に次第に色濃くその影を落としてくる一つの反映です。

「国日記」文化8年（1811）8月23日の条に見えるように、「南溜池大矢場江御出有之」、つまり藩主が直々に南溜池の大矢場へ出かけて、家臣団の弓術稽古を検閲するというのです。その関係の史料は他にもあるのですが（例えば「国日記」文化8年8月26日・9月10日・9月24日の条）、この時期から南溜池付近の施設のほとんどが軍事施設、すなわち今申しました弓術の訓練の場になります。それから後にも出てきますけれども水練—水泳の訓練の場になってくる—ということですが、これらは文化年間から急速に実施に移されるようになりました。これは文化元年に東蝦夷地永久警備を津軽藩が幕府から命ぜられることによって、領内における藩家臣団の訓練が、南溜池の付近を中心として集中的に行われるようになる。そして「国日記」文化3年3月11日の条に見えるように、とにかく南溜池の改修工事は従来の町方の負担から、郡奉行の指揮下に入ります。その方式がより具体的になるのは、19世紀半ばの「国日記」

安政5年(1858)7月21日・同同年9月11日の条に見えますが、南溜池に水練稽古場を設置するために土木工事を実施致します。そのためには南溜池の掘り上げが必要であって、これは「非常御用柄」という名目で国役高割でもって、領内全域、すなわち弘前だけでなく青森・鯉ヶ沢それから在方、領内全域の負担を精密に割り当てて、それでもって南溜池の改修工事が行ったのでした。

ここにみえる「非常御用柄」の文言とは、まさに蝦夷地警備の問題なのであり、北方問題が南溜池を含めた津軽領内に深刻な影響を与えているのです。安政年間のこととして、一つ私が注意してみたいと思ったのは、安政2年(1855)に津軽藩が箱館と西蝦夷地の警備を命じられ、さらに安政6年にはいると、幕府は各大名達に蝦夷地を分割領有させて警備と開拓をおこなわせるようになります。西蝦夷地の寿都・瀬棚までを津軽藩が割り渡されるのですけれども、従来とは異なってより具体的に蝦夷地経営に関与させられてきたのであり、ただたんに蝦夷地へ行って警備をして帰ってきましたという事態ではなくなったのです。ここにおいて幕藩体制下の津軽藩において初めて、従来の津軽領とは違う領土的な拡大、つまり不動産を津軽藩が増やすことになったのですが、そのような蝦夷地との関わりの中において、水練稽古とか、そのような領内におけるさまざまな動員の態勢がより強化・管理されてくるのだということです。このことは先程榎森先生より、蝦夷地から見ればこうなるというお話がありましたが、私のほうでは蝦夷地からの影響がこのような形で具体的に藩政、もしくは津軽藩におけるたった一つのちっぽけな南溜池のなかにストレートに反映してくるということ、ただ単に北方問題を無視しえないという観点にとどまらず、北方問題を軸にして南溜池にすらその影響が色濃く投影してくることに、我々は注意しなければならないだろうと思うのです。



おわりに

時間もないので、もうこれで終りに致しますが、このように近世都市弘前の単なる一つの溜池にすぎない南溜池、これに焦点を当ててみた場合、藩政のさまざまな動向、都市民衆の生活の問題、それから都市プランの問題、近世後期における都市問題、それから幕藩体制下における北方問題というものが直接的・間接的に反映してくる様相を見てきました。すなわち北の城下町弘前の動向を映す一つの鏡として、南溜池をもう一度見直す必要があるのではないかと考えた次第です。先程ちょっと触れましたが、1989年3月に弘前市教育委員会から『南溜池－史資料と考察－』という書籍が刊行されましたが、この解説と考察の中で今日申し上げました骨格は触れてありますので、それをご覧いただければ幸いです。ご静聴ありがとうございました。



